

石とーん・さーくる

No.117

発行 新潟県石仏の会(代表 星野 紀子) 2023年7月10日 発行
事務局 〒945-0837 柏崎市三島町16-2 渡邊三四一 電話0257-22-1941
ホームページ <http://niigata-sekibutu.vox.jp>

石仏散歩

佐渡市金井新保の

八幡宮の「筆塚」について

佐渡市 北見 継仁

佐渡市金井新保にある八幡宮は「新保」・「西方」・「大和田」集落の産土社であり、神仏混交の名残をとどめ、僧侶と神職の両方の管理のもとに運営されている。

八幡宮の境内、鳥居の前の手洗石の傍らに高さ一三四センチの大きな石碑がある。中央に「筆塚」、右側面に「明治三十四年八月 三忍子門人建之」とある。筆塚は使い古した筆の供養のために、筆を地中に埋めて築いた塚の場合もあるが、この筆塚は、寺子屋や家塾で教育を受けた教え子達が師匠の徳を偲んで、自分たちで費用を出し合って建てた塚である。「三忍子」とは高木悟了(たかぎ ごりよう)のことであり、通称利丸、寺小屋および俳諧の師匠であった。悟了は天保八(一八三七)年、相川紙屋町の高木仁兵衛の二男として生まれ、幼いころから叔父の高木君海に学問を授かった。

悟了は十二歳の年、相川左門町の浄土真宗蓮光寺にもらわれた。そこで僧としての修行のかたわら、和歌を松原御中に、俳句を大坂の桃水に学んだ。悟了が成人するころ、蓮光寺の住職に実子が生ま



れたため寺を去り、寺小屋の師匠になった。佐渡では、幕末ごろから各地で民家や寺院の一部を教場にしたり、寺小屋がさかんに開設され、町人や農家の子弟の教育が行われるようになっていた。寺小屋に通う子どもは「寺子」とか「筆子」と呼ばれて、六、七歳ころから十四、十五歳くらいまでの間、読み・書き・そろばんを習った。

悟了はまた俳諧も指導するようになり、さらに青年たちに漢籍も教えた。その門人たちの数は数百人にもものぼったといわれている。

明治三十四年、悟了の徳を讃えるため門人・有志の手によって新保八幡宮の境内に「筆塚」が建てられた。その五年後の明治三十九(一九〇六)年十二月十八日、病に倒れた悟了は六十九歳で世を去り、門人たちによって茶毘に付され、遺骨は蓮光寺の墓地に納められた。悟了の毎年の命日には、師を慕う門人たちが新保八幡宮に集まり俳諧の追悼会が催された。

事務局だより



◆中越地区見学会のお知らせ

日時 9月11日(月) 8時30分～16時

テーマ 十日町市川西の千手観音堂と鉢の石仏を歩く

集合 ①8時30分 アルフォーレ前駐車場

(柏崎駅前・赤レンガ風トイレ前)

②9時30分 道の駅・瀬替え郷せん

だ駐車場(十日町市中仙田)

解散 道の駅せんだ15時、柏崎駅前16時

見学地 川西赤谷の十二神社の石仏群、千手

観音堂石仏群(長徳寺)、川西地区文

化財取蔵庫、鉢の石仏など

昼食 小嶋屋総本店

(天せいろそば、うどんも可)

参加費 5000円(昼食・バス代を含む)

定員 20名

締切 8月31日(木) ※先着順

申込み 中越事務局 伊比卓郎まで

(携帯電話かEメールで)

電話 090・7275・8869

Eメール tribi@poppy.ocn.ne.jp

◆下越・新潟地区見学会のお知らせ

日時 10月12日(木) 9時～16時

テーマ 角田山周辺の歴史と石仏を訪ねて

集合 ①9時 新潟駅南口バスロータリー

②9時40分 新潟市西区赤塚・佐潟

公園駐車場

解散 佐潟公園15時20分、新潟駅南口16時

見学地 佐潟公園、鳥の子神社、妙光寺(岩の

題目等)、七面天女洞窟(賽の河原)、

角田浜の石塔と弁慶の舟かくし、仙

城院、松野尾若宮神社、松山題目塔、

布目庚申塔・馬頭観音、万福寺など

予定

昼食 そら野テラストネリコ

参加費 5000円(昼食・バス・資料代等)

定員 20名

締切 9月30日(土) ※先着順

申込み 新潟事務局 堀内正子まで

電話 025・243・7640

携帯 090・7275・8869

有志一泊見学会(高遠の旅)は同封
チラシにてご案内します。ぜひご参
加お待ちしております。

◆令和5年度総会を開催しました

今年度総会を5月14日(日)、新潟県立歴史博物館講堂にて開催しました。第一部の公開講演会是一般23名、会員34名の参加を得、計57名の盛会となりました。

講師の同館・前嶋敏専門研究員からは「中世越後の信仰と石造物」と題し、越後北部に所領を持った色部氏と粟島の板碑群との関連を中心に、越後における石仏黎明期の様相について平易にご講演賜り、会員一同理解を深

めることができました。

第二部の総会(14時40分)では令和4年度事業報告・決算報告、令和5年度事業計画・予算案、さらに創立30周年記念事業計画案・予算案が審議・承認されました。欠席者へは総会資料を同封しますのでご確認ください。

◆「すとーん・さーくる」合本が完成

創立30周年記念事業の会報1号～95号の合本が完成し、このほど県内公立図書館等に寄贈を完了しました。会員には目次集を同封します。本書の閲覧・借用は最寄りの図書館にてご利用願います。なお、各支部事務局にも一冊配布しましたのでお声がけください。

お願い 今年度の会費未納の方には振替用紙を同封しました。早めにご納入願います。

編集後記

コロナ禍の落着きを踏まえ、上越地区の石仏見学会を先般四年ぶりに無事開催致しました。事務局が交代して初めての事であり、不安が先立ちましたが、各位の協力を得て実行できたことに安堵しております。尚、バスの中に「見学会のしおり」が一部置き忘れてありましたので、心当りの方は上越事務局までご連絡ください。

上越地区事務局 栗間啓志

本号編集担当 上越地区事務局

いといがわ2023 上越地区石仏見学会 に参加して

上越市 佐野 貞三

四年ぶりの上越地区見学会であり、期待が膨らむ。天気は快晴!! 9時前に直江津駅に出向き、電車による参加者の受付手続きに対応する。始発地より乗車済みの仲間と合流し、バスは高速道路を一路糸魚川目指してひた走る。

◆水保観音堂

最初に集合写真を撮ったあと境内に入る。地藏菩薩、聖観音、馬頭観音、大乗妙典一千部読誦供養塔、五輪塔などを順次見学し、更に奥に続く石段を上った先にある、重要文化財・木造鉦彫りの十一面観音立像を祀った「宝安殿」を仰ぐ。麓の池の中島には、鎌倉時代に後醍醐天皇の倒幕計画に加担した罪として、佐渡に配流になり処刑された日野資朝(ひのすけとも)の墓とされる五輪塔が、ひっそりとあった。

◆雲大寺

融雪による土砂崩れ跡の脇をバスは通り抜け、奥地の御前山にある雲大寺に着いた。越後横道三十三霊場の第一番札所である。樹木がうつそうと茂る参道脇には数多

くの馬頭観音が見られた。境内の岩屋に嵌め込まれた三尊仏を始め、地藏菩薩、十一面観音など多くの石仏を見学することができた。観音堂の軒下には、注連縄のようにくるりと網が巻かれていた。見学を終えた戻りの道すがら、山菜を摘んでいた方も見られたが、それもまた、見学会の楽しみの一つであろう。

◆街道沿いの石仏群

御前山を背にしてバスは元の道を下る。この道はその昔、信濃に至る「塩の道」の街道として往来が盛んであった。近年、県道として道路拡張整備が行われ、羽生地区の路傍に点在していた石仏が、一か所に集約されている。馬頭観音、双体道祖神、不動明王、阿弥陀三尊が整然と配置保存されている様子を確かめられて安心した。

◆蓮台寺

この地は、七社大神と称する神社の境内であるが、社殿と並んで応供殿(羅漢堂)が神仏混淆により併設されている。羅漢堂に



街道沿いの石仏群(左端が双体道祖神)

は、須弥山のような四角錐の階段状の壇に、五百余体の県内唯一の石造羅漢像が圧倒的な様相で居並んでいた。更にそのほかに庚申塚や猿田彦大神等も見られた。

◆金蔵院

この地区は根知川上流にあり、かつては密教修行の拠点であった。参道両脇の石垣の上には、三十三観音の数多い石仏群が居並び圧巻であった。その下の石段で記念の集合写真を撮ったあと、境内の宝物殿を住職の案内により、下部に蓮華の花が彫られている珍しい在銘の板碑を拝観させて貰った。

計画通りの石仏見学を楽しく終え、予定時間丁度糸魚川から直江津の解散地に無事に帰着できたのは、関係者の方々のご協力によるものと感謝しています。



金蔵院(糸魚川市根知)にて

人か仏か羅漢さまか

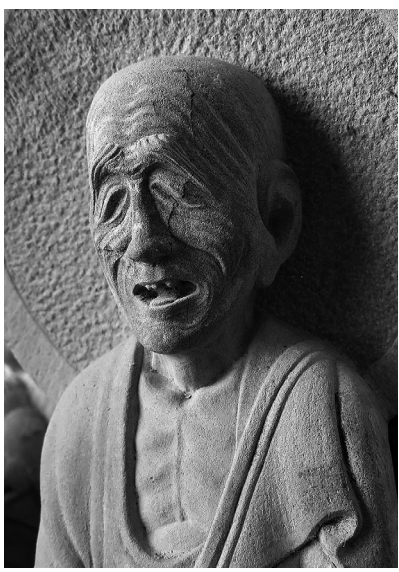
上越市 栗間 啓志

新緑が爽やかな日差しの中、糸魚川市蓮台寺にある「五百羅漢」を訪ねた。

やや薄暗い羅漢堂に足を踏み入れた瞬間、幻覚におおわれて佇んでしまった。堂内には様々な笑い声や叫び声、泣き声や話し声などが溢れていたのである。

目を凝らすと、須弥山を模した四角錐の頂点に釈迦如来像が安置され、その麓の階段状の壇を埋めるようにして五百余体の多様な姿態や表情をした石造羅漢像が、びっしりと隙間なく配置されている圧倒的な様相に我に返った。

石質は硬質砂岩のため、雨露を凌ぐ堂内でなければ、風化による崩壊が進んでいたであろう。



この五百羅漢の造立者は蓮台寺村の昌禪寺十七世玉瑞和尚であり、発願(天保三

年：一八三二年)から十一年の歳月を重ねて糸魚川はもとより、上越全域から魚沼、中越、更には北信濃まで托鉢行脚に回り浄財を募ったと伝えられてい



る。羅漢とは、釈迦の弟子で仏の説法を学び最高の悟りを得た聖者を指し、いわば仏と人との中間的存在と言えるよう。

これらの数多い羅漢像を彫ったのは、著名な仏師や名のある石工ではなく、糸魚川近郷の早川沿いにある上覚や早川谷集落の石臼や石鉢等の製造を生業とする石屋衆によるものとされている。従い、彫られている羅漢像は近在庶民の諸相がベースとなっている事は明らかであろう。

それにしても「五百」という数は途方もない数量であるが、尚且つそれらの像容や表情がすべて異なっているのが驚異的

としか言いようがない。

通俗的に、五百羅漢の前に立つと、その中に亡くなった人の面影に出会える：とされているのは、五百通りの民衆の有様を写し取っているからに他ならない。

羅漢の像容から受ける印象には、如来や菩薩のような崇高さや静謐感が見られないが、何よりも庶民的な親近感が溢れている。人間味あふれる多彩な存在感に諸仏像とは明らかに異なるものであり、拝観する者との距離感を忘れさせる。

もって五百羅漢の彫像は、我が身を投影する疑似修行者に相当し、迷いの苦界から民衆を救済する羅漢信仰の象徴として尊崇を集めたことに相違ない。

